

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00330

研究課題名（和文）1950-70年代における文化資源としての「文学」に関する研究

研究課題名（英文）Study on "Literature" as a Cultural Resource in the 1950s-1970s

研究代表者

山岸 郁子（YAMAGISHI, Ikuko）

日本大学・経済学部・教授

研究者番号：90256785

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：文学館は博物館法と図書館法が施設を定義しているが、どちらかに傾斜している文学館もあれば、どちらの要素も兼ね備えているものも存在する。つまり「文学」や「文学者」に関する資料を収集し、保管し、調査研究機関となっているものもあれば、「文学」や「文学者」に関する資料を展示して一般公衆の利用に供し、講演会やイベント事業を行う機関もある。コロナの自粛期間を経て、国立国会図書館や一部の文学館では原資料のデジタルアーカイブ化が進み、「資源」に社会性、公共性をもたせるための力になっている。文化資源を持続可能なものとして支えるためには価値を見出し保存していこうとすることを共有することが重要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

地方文学館にて調査を行なった。地方文学館の展示における資料の選択とその配列には、文学者の身体性とその土地の風土性が反映されており、風土が作家の内面を作り出したのだという類型的ともいえる物語が存在していた。戦後、文学の活況に支えられて近代文学研究も進み、作家論がそのベースとなっていた時代である。地域における文学や文学者が地方の固有性を裏付けることであり地域ステータスの証明であった。ここに「価値」が生まれ文学や文学者は保護される「資源」となっていた。現在地域ならではの「資源」や文化を護ろうとする取組みや、観光により地域を活性化しようとする動きの中で、文学館の新たな価値の創出が必要になる。

研究成果の概要（英文）：The Museum Law and the Library Law define facilities for literary museums, and while some literary museums are inclined toward one or the other, others exist that combine elements of both. In other words, some collect and store materials related to "literature" and "literary figures" and serve as research and study institutions, while others exhibit materials related to "literature" and "literary figures" for use by the general public and conduct lecture and event programs. After the period of self-restraint in Corona, the National Diet Library and some literary museums have made progress in digital archiving of original materials, which is a force for making "resources" social and public. It is important to share the desire to find value and preserve cultural resources in order to support them sustainably.

研究分野：日本近代文学

キーワード：日本近代文学 文化資源 文学館 文学研究

## 1. 研究開始当初の背景

現在出版ビジネスは深刻な不況に直面し、文学の市場価値も低下の一途を辿っている。これまで文学を支えてきたインフラや再生産装置は機能不全を起こしているといってもよい。日本語市場における出来事である以上、過去は現在や未来を映し出す鏡になりうる。本研究では高度経済成長期の文学者(作家・批評家など)を中心に戦後彼らのメディアの活動について東京と諸地域との関係も含めた多角的な視点から調査・分析して位置づけ、そのインフラや再生産の仕組みや実態を明らかにすることで、文化資源を捉え直し、今後の文学や地域文化のあり方に資することを目的としている。成果として「文化資源アーカイブス・リサーチ・ネットワーク」の出発点となるデータベースを構築する。このデータベースは地域の観光案内・生涯教育・学校教育における「調べ学習」などにおいて広く利用価値のあるものを目指すこととした。

## 2. 研究の目的

地域(東京を含む)の文学館がどのように文化資源を活用しているのか実地踏査を行い、その土地において文芸ジャーナリズムやインフラ・システムがどのような意義(あるいは意味)を持つのかを確認するとともに、現在におけるその活用方法を再検討し、文学館へ提案する。また、文化資源の活用や見せ方の提案を行うことにより、「地域」の再発見に繋げたい。作成した文学館に関するデータベースは小中高に通う児童・生徒にとっての各種調べ学習ツールとしても活用できるようにしたい。来訪者や転入者にとってもその土地の魅力に触れる機会を増大させる効果をもち、歴史や文化に関心を持つ人びとや、訪日外客に対しても効果的にアピールすることにもなる。具体的には研究代表者の山岸郁子が高度経済成長期に文化資源としての作家がどのような役割を果たしたのか、文学館に展示されている作家について調査を行い、展示の構成などから、文化的意味付けについて分析し、また観光資源としてどのように活用されているのか行政資料にも目を配りながら明らかにする。主たる対象である各文学館との相互信頼にもとづいて情報交流を促すとともに、文化資源の研究データベースを構築するなどの方法があるだろう。文学館がそれぞれに蓄えた文献学の成果を基盤に、収蔵資料の画像と研究情報を含む最新データを統合し、従来にない密度の高い文学館資料のアーカイブス化に向けて、社会に共有される研究実践を成し遂げる。さらには研究分担者の十重田裕一がメディア状況や文学者の活動を調査分析した上で、諸地域において作家や文学作品といった「文化資源」がどのように発見され、活用されているのか実態調査を行う。戦後日本では、全国総合開発計画で打ち出された「均衡ある国土の発展」という理念に象徴されるように、様々な政策分野において中央集権型の計画策定にもとづく経済発展に向けた産業政策が行われたが、開発を受容する地域の側には固有の歴史・風土・文化・民俗性があり、画一的な開発政策と地域固有の事情の狭間で、さまざまな問題課題が生じてきたといえる。本研究では高度経済成長期以降の産業政策や国土開発をめぐる状況の変化により地域における「文学」・「文学者」が産業の振興にどのような役割を果たしたのか、またその影響について、文学館の研究員、社会学者、地方財政学者などと研究会を行い、総合的に検討する。さらに文化資源としての「作家」ならびに「作品」が再発見される社会的な背景(事情)について調査・分析を行う。これらの研究活動を通して得られた新情報については文学館等関係機関に迅速に通知し共有し、本研究で蓄積したデータについては調査対象の文学館に提供することを前提としたい。将来的には「文化資源アーカイブス・リサーチ・ネットワーク」を構築することを目指すことを提案したい。

## 3. 研究の方法

文化を「資源」として捉えるということは、それが現代に「価値」があるという前提が必要となる。また資源とは経済と文化を結びつけることでもある。ある時代の社会と文化を知るための資料、それは有形無形に関わらず現代利活用可能なものとして「価値」あるものとしてよいだろう。本研究では文化資源として日本近代文学を考えるために「文学館」に焦点をあて調査を行なっている。「資源」と考えることで作家や作品それ自体のみばかりでなく、社会的な背景、環境を含めて統合的に考えられ、制度設計がなされているからである。文学館はそれぞれが極めて自覚的に枠組みを構築している。しかし近年市場的な「価値」が必要とされてきた。2003年に制定・公布された「指定管理者制度」を一つの契機として、多くの文学館は財政を意識せざるをえない。この制度を選択していない文学館もまた、効率的運用やシステムの合理化が期待されるのである。

文学は戦後も文化の中心にあって1960年代から70年代にかけて最盛期を迎えたが、80年代以降、文化としても産業としても衰退の一途をたどり今日に至っている。とくに「純文学」と呼ばれてきた既成の文壇文学の落ち込みがひどく、各種のエンターテインメント文学や漫画やアニメなどのサブカルチャーによりある程度の代替がなされたが追いつくことはない。それを反映するかのように、戦後急増した大学や出版社の文学研究・教育部門を縮小、統合、廃止する動きが今日まで続いている。文学や文学研究は、かつて有していた文化や教育における特権的地位を失い、危機に直面しているといつてよい。このように市場的に困難な時代を迎えている文化資源を利活用可能、循環可能なものとしてどのように捉え直せば良いのか、まずは各文学館の実態を知るために財政運営と企画の関連性について調査を行ない、作家の持つ強度を客観的に把握し、その可能性を具体的・個別的に探った。

#### 4. 研究成果

地方文学館(小樽文学館・山梨県立文学館・高志の国文学館・宮沢賢治文学館・小川未明文学館・こおりやま文学の森記念館・松本清張文学館、徳田秋声記念館、室生犀星記念館、泉鏡花記念館、福岡市総合図書館)について収蔵資料と公開されている範囲の運営資料についての調査を行った。特に北九州市松本清張記念館では「これからの文学館のかたち」の提言、こおりやま文学の森記念館では企画の提言を、小樽文学館、徳田秋声記念館、福岡市総合図書館では講演を行った。

2003年に制定・公布された「指定管理者制度」を一つの契機として、多くの文学館はかかるコストを意識せざるをえなくなっている。この制度を選択していない文学館もまた、効率的運用やシステムの合理化が期待されているが、文学館同士のネットワークで展示企画を立て、資料の貸し借りをし、層の厚い企画を実現している。

現在まで続いている「文豪」ブームがあり、作家自体への興味持つ人びと(特に若年層)が現れている。漫画・アニメあるいはゲームから「文豪」に興味をおぼえた人たちは、文学館へ足を運び、展示物を通してキャラクターの新たな一面を見出すといった、従来のオーセンティックな鑑賞法を身につけている人たちとは異なる受容方法をとっている可能性は高い。従来正統とされてきた鑑賞法というものは原稿、メディア、肉声、肖像、生活空間の復元など文学を確かに生きた人間の営為であったことを受容するよう展示によって誘導され身につけたものである。しかしキャラクターから眼差す文学世界というものは、我々が囚われている文芸・文学の鑑賞世界とは異なった世界像を感受する可能性があるといえ、そのような人びとは今後の文学館の利用者として期待できる。従来の作家論とは違ふかたちで「作家」を捉え直す契機にもなるだろう。コラボレーションの成功を分析し、文学者をキャラクターとして捉えることによってすでに確立している制度や枠組みに揺さぶりかけるとともに文学館に新しい可能性をもたらしてもいることが明らかになった。郷土の作家を「文豪」コンテンツから見直すといった試みは多くの文学館で入場者数の増加をもたらしている。

文学館協議会の当初の目的は人的ネットワークの構築ということもあるが、もう一つの目的は文学館相互館での巡回展や共同企画展の実施である。しかし、内実は所蔵資料が少ない文学館に対して多い文学館が資料を融通していることが明らかになった。例えば近代文学館は、1展300万円で所蔵資料をもとに企画・構成した展示パックを貸し出している。「石川啄木」展や神奈川近代文学館と共同企画の「夏目漱石」展のような個人作家展、「愛の手紙」展や「文学・青春」展のようなテーマ展などのパックが用意されている。地方の文学館などが主な購入先であるが、地方文学館の多くは事業費が削られており、1展を分割したり、200万円の中型パック、100万円の小型パックなどを企画・製作する必要があるだろう。

指定管理者制度と会計年度の非正規職員の採用により人件費が真っ先に削減される対象となつているところが多く、協議会が育成しようとしている博物館学芸員でも図書館司書でもない(文学館学芸員)も、正規職員としての研究員、学芸員としての採用が難しくなつていることも深刻な問題であることが明らかになった。持続性のある専門職員の採用は重要である。また、文学展示実施において資料の貸し出しの簡便な方法、来場者管理システムの共有化について、本研究から得られた知見を積極的に提案していきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 山岸郁子	4. 巻 86
2. 論文標題 渉猟された文学の行方	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 昭和文学研究	6. 最初と最後の頁 203-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山岸郁子	4. 巻 なし
2. 論文標題 「心境」をとらえるということ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 まなざしと記憶 福岡市文学館	6. 最初と最後の頁 2-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山岸郁子	4. 巻 46
2. 論文標題 伊藤整研究者としての曾根博義	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 市立小樽文学館報	6. 最初と最後の頁 2-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 十重田裕一	4. 巻 888
2. 論文標題 横光利一の時代とメディア	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 図書	6. 最初と最後の頁 32-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山岸郁子	4. 巻 2
2. 論文標題 近代日本における人文知移動の動態的研究について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 近代日本における人文知移動の動態的研究	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山岸郁子	4. 巻 2
2. 論文標題 近代作家データベースの集計方法	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 近代日本における人文知移動の動態的研究	6. 最初と最後の頁 119-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山岸郁子	4. 巻 69 ( 7 )
2. 論文標題 久米正雄「父の死」を読むー表現の系譜をたどる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 44-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山岸郁子	4. 巻 冬
2. 論文標題 文学館、文豪、そしてほんとうの「資源」とは	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田文学	6. 最初と最後の頁 94-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 十重田裕一 (ロバート キャンベル 藤井康栄との鼎談)	4. 巻 21
2. 論文標題 これからの文学館のかたち	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 松本清張研究	6. 最初と最後の頁 102-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山岸郁子	4. 巻 17
2. 論文標題 「文豪」イメージを消費すること	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 横光利一研究	6. 最初と最後の頁 75-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山岸郁子	4. 巻 19
2. 論文標題 「伊藤整文庫」資料からわかること	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本近代文学館年誌 資料探索	6. 最初と最後の頁 80-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山岸郁子	4. 巻 176
2. 論文標題 「文壇」の力学についての一考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 語文	6. 最初と最後の頁 130-154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 十重田裕一	4. 巻 38
2. 論文標題 美しい日本と美しくない日本ー川端康成と松本清張の点と線	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 河端文学への視界	6. 最初と最後の頁 44-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 十重田裕一	4. 巻 100-10
2. 論文標題 占領期日本の文学者と編集者をめぐるメディア検閲ーブランゲ文庫所蔵の横光利一『旅愁』と検閲済み校正刷の再検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 十重田裕一	4. 巻 22
2. 論文標題 上京者たちによる新しいメディアの創造と発信ー『文藝時代』創刊と新感覚派の東京をめぐって	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 横光利一研究	6. 最初と最後の頁 16-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 山岸郁子
2. 発表標題 文壇の「発掘」と「創成」
3. 学会等名 日本近代文学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 十重田裕一
2. 発表標題 美しい日本と美しくない日本 川端康成と松本清張の点と線
3. 学会等名 川端康成学会（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山岸郁子
2. 発表標題 「よみうり抄」と久米正雄
3. 学会等名 日本の新聞彙報欄を活用した研究の国際ワークショップ ーメディア・大正時代・「よみうり抄」（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 十重田裕一
2. 発表標題 「時代の黙した諫言者」の「文学」の軌跡
3. 学会等名 横光利一文学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山岸郁子
2. 発表標題 住所録データベースの可能性
3. 学会等名 日本大学経済学部グローバル社会文化研究センター
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 十重田裕一
2. 発表標題 「時代の黙した諫言者」の文学の軌跡
3. 学会等名 横光利一文学会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hi rokazu, Toeda
2. 発表標題 The Light and Shadow of Matsumoto Seicho: Mass Media and Literature in Japan's Era of Rapid Economic Growth, Matsumoto Seicho Media, Adaptation, and Middlebrow Literature,
3. 学会等名 Matsumoto Seicho Media, Adaptation, and Middlebrow Literature UCLA（国際学会）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 十重田裕一	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 286
3. 書名 孤独を駆ける 川端康成	

1. 著者名 十重田裕一	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 416
3. 書名 横光利一と近代メディア	

1. 著者名 十重田裕一（編著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 493
3. 書名 作者 とは何か	

1. 著者名 山岸郁子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 こおりやま文学の森	5. 総ページ数 32
3. 書名 甦る文豪たち 図録	

1. 著者名 山岸郁子	4. 発行年 2024年
2. 出版社 福岡市文学館	5. 総ページ数 48
3. 書名 まなざしと記憶 図録	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	十重田 裕一  (Toeda Hi rokazu)  (40237053)	早稲田大学・文学学術院・教授   (32689)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------